

平成 21 年 5 月 19 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2009 年度
課題番号：18530271
研究課題名（和文）第 1 次世界大戦と中東の生成——イランの為替と金融を中心として——
研究課題名（英文）The First World War and the Creation of the Middle East :
Focusing on the Exchange and Finance of Iran
研究代表者
水田 正史（MIZUTA MASASHI）
大阪商業大学・総合経営学部・教授
研究者番号：80219633

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：イラン、トルコ、イギリス、ロシア、第 1 次世界大戦、帝国主義、金融、中東

1. 研究計画の概要

(1) 第 1 次世界大戦勃発時の諸外国によるイラン支配を、諸銀行の役割に焦点をあてて解明する。

(2) アラブ国家形成のための資金がいかんして調達されたかを、イギリスの対イラン金融との関連に目配りして解明する。

(3) 1915 年のコンスタンティノーブル協定の「中東世界」生成における役割を解明する。

2. 研究の進捗状況

(1)

①第 1 次世界大戦勃発時におけるロシアのアゼルバイジャン支配は、行政官の任免、警察、徴税という支配の本質をなす重要な領域全体に及ぶものであった。ギーラー地方へは兵士のみならず農民も侵入していた。すなわち、この地は実質的には植民地なのであった。そして、この実質的な植民地支配においては、ロシア国立のペルシャ割引貸付銀行が大きな役割を演じていた。

②これに対して、イギリスのイラン浸透は、ロシアのそれとまったく異なっていた。イギリスの場合は、それは、貿易ルートを押さえることによる経済浸透とでもいべきものであった。

③ドイツのイランへの浸透は、イランの農民を保護しドイツ帝国臣民化するという形をとった。英露協商の矛盾の表出点たるエスファハーン近辺においてであった。ロシアもエスファハーン近辺においてイラン農民の臣民化を行なった。そしてここにもペルシャ割引貸付銀行が大きく関与していた。支配に金融が大きく関与していたのである。

(2) アラビア半島で形成されようとしていた国家は、その資金的の中核としての銀行を必要としていた。そのような銀行として、当時すでに存在していた帝国オスマン銀行ジッダ支店はふさわしくなかった。同行は多国籍的性格を有しており、世界戦争勃発によってアイデンティティーを引き裂かれてしまった。このアイデンティティーの裂け目は、協商側と同盟側のあいだのみならず、イギリス・フランス間にも存在した。

(3) 1915 年のコンスタンティノーブル協定は、「海峡問題」とイラン問題とが 1 つの文脈に統合された主な事例としては最初のものであり、「中東世界」生成を告げるものであった。

3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。イギリスでの史料収集が予想以上の成果をあげたため。

4. 今後の研究の推進方策

(1) イランにおける同盟側の資金調達の詳細を解明する。

(2) イランにおける為替不足の問題を、それへの対策に焦点を当てて解明する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

①水田正史「トルコ分割とイラン再分割」『地域と社会』査読無、11 号、2008 年、125～142 ページ

②水田正史「第 1 次世界大戦の終結と中東の

生成」『大阪商業大学論集』査読無、149号、
2008年、21～30ページ